

## 審査の結果の要旨

氏名 大久保 圭介

本論は、ケアギビングに関する心理的表象の性質を、行動システムの不活性化および過活性化という視点から捉え、その二次元に現れる特性的な行動傾向（以下、ケアギビング傾向とする）の発達と二者関係における機能等を明らかにすることを目指したものである。

第1部（研究1）では、理論研究として、アタッチメント理論をベースとして展開されているケアギビング行動に関する研究の現況を整理し、問題提起を行った。そして、第2部では、まず研究2において、実証的検討を行う上で必要となる、行動システムの不活性化および過活性化という二次元に沿ってケアギビング傾向を測定する尺度（日本語版CSS）の開発を行った。続く研究3では、4カ国で調査された既存のデータを再分析し、参加者の特性をより敏感に識別できる項目を抽出し、より少ない項目数の尺度を構成し直した。

第3部の研究4では、保護者の自由記述を基に、幼児期から児童期までの子どもにおける、年齢の違いによるケアギビング行動の質的な変化を探索的に示した。その結果、年齢が上がるにつれて、身体的に働きかけるケアから情緒的なケアへと移行していく様子や、自身にできるケアを理解し、適切に他の資源を活用するようになるといった変化が明らかになった。また、幼児期頃から、既に不活性傾向や過活性傾向の特徴を示す関わり方を示す子どもの存在も示唆された。研究5では、より長期的な視点で、幼児期から青年期前期、および青年期から中年期に入るまでのケアギビング傾向の標準的な発達軌跡を、データに基づき描出することを企図した。不活性傾向は幼児期から児童期中期までは緩やかに低下し、その後は上昇していくという軌跡が、一方、過活性傾向は幼児期以降緩やかに上昇し続け、20代後半から徐々に低下していくという軌跡が示された。また、青年期前期までは、得点の高さに性差が見られた。続く研究6では、ケアギビング傾向の世代間伝達の検討を行った。その結果、青年期前期の子と親のペアでは、過活性傾向について、アタッチメント傾向の個人差によって媒介されない直接的な世代間連関が認められた。親に対するアタッチメント傾向や被養育経験はケアギビング傾向とそれほど大きく関連しないことも示された。研究7では、ケアギビング傾向の個別的な変化パターンとそれに関連する要因を検討するために短期縦断的な調査を行い、結果として、大半の個人においてケアギビング傾向が、時間軸上においてあまり大きくは変化せずに推移することが見出された。

第4部の研究8では、恋愛関係にある男女を対象にした研究を行った。男女ともに、相手のアタッチメント傾向が安定している場合には、ケアギビング過活性傾向が相手の探索行動と正に関連することが示された。研究9では、子どもの探索と悩みの多さに対する親のケアギビング傾向の影響を検討した。その結果、特にケアギビング不活性傾向が子どもの悩みの高さに関連していることが示された。研究10では、高校生の子と親のペアを対象に、アイデンティティ探索に対する親のケアギビング傾向の影響を検討した。結果として、特に父子関係において父親のケアギビング傾向が、一部では子どものアタッチメント傾向と組み合わせあって、子どものアイデンティティ探索を阻害し得る可能性が示唆された。

最後に第4部の総合考察において、得られた全実証的知見とその実践的・理論的な含意を整理し、加えて、今後に残された課題と展望に関して総括的論考を行った。

本論の学術的意義は、これまで十分に検討されてこなかった人の生涯に亘るケアギビング傾向の発達過程やその機序等に関して、アタッチメント理論の立場から多くの実証的知見を得、今後のこの領域におけるさらなる研究の発展に通じ得るであろう理論的視座を示し得たという点にあり、博士（教育学）の学位を授与するにふさわしいものと判断された。